

承認 第27回 中央常任委員会 (2019年9月24日)
承認 第14回 中央委員会 (2019年9月24日)
2019年度第1回公開全学協議会 (2019年10月2日)

2019年度全学協議会における学友会見解

(見解文書)

2019年度立命館大学学友会中央常任委員会

目次

0. はじめに	2
1. 教学施策	3
2. 学生生活の向上	5
3. 今後の学園創造について	7

0. はじめに

本文書は、2019年度第1回公開全学協議会で協議したいと考えている論点について、立命館大学学友会中央常任委員会で検討を進め、学友会の最高議決機関である中央委員会において承認した見解文書である。第1回・第2回代表者会議および各種懇談会を経て論点を整理し、「全学学生アンケート2019」をもとに公開全学協議会において協議したい論点および求める点を示した。

なお、第1回・第2回代表者会議で議論を行ったが、本文書に記載されていない論点は、「別添資料（2019年度全学協議会確認文書に向けて協議したい論点）」に記載している。別添資料に記載している論点は既に懇談会等で議論し、確認が出来ている、もしくは今後キャンパス懇談会や五者懇談会等で議論をしたいと考えるものである。それらの事項についても、全学協議会での確認事項と合わせて、確認文書において議論した内容が反映されることを求める。

2019年度全学協議会における学友会における主要な論点は以下の3つである。

【主要論点】

1. 教学施策
2. 学生生活の向上
3. 今後の学園創造

1. 教学施策

◎受講登録

全学学生アンケート p4-5/補足レジュメ p14-15

受講登録において、シラバスは情報収集を行うための重要なツールである。第1回代表者会議において、受講登録の本登録期間は、あくまでシラバスを熟読した上で、講義を選択する期間（第1回目の講義で受講を決めるものではない）という認識であることを確認した。そのため、シラバスは受講登録で講義を選択する上で、学生が熟読し、確認するべきものであると考える。

「全学学生アンケート2019」において、学生がシラバスのどの項目を確認しているか調査したところ、学生がシラバスで確認している項目には偏りがあることが分かった。また、現行のシラバスに記載してほしい項目についての回答結果を見ると、「前年度の成績分布」や「授業アンケート結果」などを求めていることがわかった。

大学が実施している授業アンケートの結果の公表については、周知が十分でないことを第1回代表者会議にて確認した。学生からも、「公開している場所がわかりにくい」「授業アンケート結果が見にくい」という声が「全学学生アンケート2019」で挙がっており、改善を求めたい。また「全学学生アンケート2019」において、受講登録の本登録期間について「1回目の講義を受けた上で受講するかどうか決めたい」と回答した学生が約半数と、見直しを求める声が多かった。

また、第2回代表者会議において、大学より「『全学学生アンケート2019』をもとに、シラバスの見直しを、2020年度にむけて検討する」という回答があった。以上については、大学としてどのように検討を進め、学生に周知するのか、時期の目処を含めて確認を求めたい。

これらを踏まえ、下記の点を求める。

【全学協議会での論点】

- シラバスの記載項目の見直し
- より学生に伝わるようなシラバスへの改善
- 学生に開かれた受講登録のしくみの構築

《別途懇談会での議論を求める事項》

- 授業アンケート結果の周知、公開方法の見直し
- 受講登録の本登録期間の見直し

◎講義におけるフォローアップ

全学学生アンケート p6-7／補足レジュメ p16

これまで各種懇談会や第1回代表者会議を通じて、manaba+Rの教材機能の利用促進について議論を行ってきた。その結果、講義の特性に応じて実態も異なることがわかった。このことから、講義規模や特性に応じた利用率の目標を定め、利用促進を行うよう求める。

また、第2回代表者会議では、教材資料の配布をmanaba+Rの中で教材機能に変わる別の機能を使って配布を行っている可能性があることを確認した。今後、教材機能だけでなく、manaba+Rのそれぞれの機能についても利用実態調査の結果を共有し、どのような使い方が学生・教員のどちらにとっても利便性の高いものであるのか、検討していきたい。

【全学協議会での論点】

- manaba+Rにおける教材機能利用率の数値目標設定
- 上記目標達成に向けて利用方策の具体化・実施

《別途懇談会での議論を求める事項》

- manaba+Rにおける教材機能以外の機能の利用推進

◎英語での学び

全学学生アンケート p9-10／補足レジュメ p17-19

グローバル化が進む社会において外国語教学は重要である。本学における外国語教学は英語をはじめとして第二外国語など幅広い学びが展開されている。学友会としては、多くの学生が大学でも学ぶ英語に焦点を当て、議論を行いたいと考える。

第1回代表者会議を経て「学びと成長調査」の結果や、Beyond Borders Plaza (BBP) の利用実態、CEFRの結果を参考に外国語の学びについて議論を行ってきた。学生の英語の能力に関する調査であるCEFRのB1レベル到達者は全学部生・全回生で9263人(2013年度7607人)であり、高い水準の学生が増加傾向にあるが、「全学学生アンケート2019」の結果では、英語の学びについて身についたと実感している学生はおよそ3割である。このことから、学生の学びの実感と実際の能力のスコア値に乖離が見られる。

また自由記述の回答からはクラス分けや、クラス間の講義の進め方の違いについて否定的な記述も見受けられた。このことから、下記の点を求める。

【全学協議会での論点】

- 学生が身についたと実感できる外国語の学びの展開
- BBPに限らず、英語の学びに関わる部署が連携した学びの展開
- 各学部の特性に応じた外国語の学びについて学生を交えた議論を行うこと

2. 学生生活の向上

◎食環境

全学学生アンケート p24-25／補足レジュメ p24

「全学学生アンケート 2019」において、キャンパス環境の課題の中で、最も学生が重要視する項目が食環境問題である。中でも食堂の混雑状況について、「混雑している」と感じている学生は98%と非常に多く、すぐにでも改善を行うべき課題である。中長期的な視点に立ち、現状の課題点を分析した上で、抜本的に混雑を解消できるような施策を求める。また、交通系 IC カードをはじめとする非接触決済や QR コード決済、クレジット決済などのキャッシュレス決済を導入し、食堂だけでなく、ランチストリートなども利用しやすい環境に整備することも求める。

キャンパスによって改善できる内容も異なるため、キャンパス特性に応じた議論を展開し、改善を求めたい。

【全学協議会での論点】

- 食堂の混雑問題の現状を分析し、中長期的な視点で抜本的な混雑解消施策の実施
- キャッシュレス決済などを導入し、学生が利用しやすい環境の整備
- キャンパス特性に応じた食環境課題の改善

《キャンパス懇談会での議論を求める事項》

(衣笠)

- 食堂以外で食事をできるスペースの確保（教室 de ランチなど）
- 移動販売車・ランチストリートの導入

(BKC)

- 外部のコンビニ・ファストフード店・カフェなどの誘致
- 食堂における混雑対策

(OIC)

- 食事スペースの確保
- 食堂における抜本的な混雑対策
- 長期的な食堂の増設

◎空調管理

全学学生アンケート p22-23／補足レジュメ p25-26

「全学学生アンケート 2019」において、大学内の空調管理について不満だと感じる学生は75%と非常に多い。空調管理が適切でないと、熱中症になるなどの危険があるため、空調整備を求めたい。なお、キャンパスごとに改善すべき課題が異なる部分もあるため、キャンパス特性に応じた議論を展開し、改善を求めたい。

【全学協議会での論点】

- 講義中の空調管理について、教室の空調設備の利用方法の教員への周知・徹底
- 教室の規模・学生数に応じた空調管理の実施
- 教室だけでなく、課外自主活動施設や廊下など公共スペースにおける空調管理
- 空調管理の対応プロセスの明確化

《キャンパス懇談会での議論を求める事項》

(衣笠)

- 明学館など古い空調設備の更新
- 換気設備の整備

(BKC)

- 研究棟におけるフロア一括管理の空調管理の改善
- ジムやアリーナの更衣室を含めた空調管理の改善

(OIC)

- コンコースにおける空調の整備
- OIC ライブラリーの温度管理の改善（日光による熱で他の施設より温度が高い）
- OIC アリーナにおける空調管理の改善

◎キャンパス禁煙施策

全学学生アンケート p19-21／補足レジュメ p27-28

学友会はキャンパス全面禁煙のあり方について 2018 年度全学協議会より議論を続けてきた。健康増進法の改正に伴い、これまでのキャンパス全面禁煙から「特定屋外喫煙場所を除く敷地内禁煙」となることは、実態に即した形となるため、一定評価する。とはいえ望まない受動喫煙の影響を受ける学生が未だ多くいることは事実である。以上より、下記の点を求める。

【全学協議会での論点】

- 望まない受動喫煙の防止
- 健康を意識した喫煙リスクの周知および卒煙支援

3. 今後の学園創造について

◎学費

補足レジュメ p39-42

今回の学費政策に関して、学友会としては十分な説明、協議が行われていないため反対の立場を示す。その上で以下を論点とする。

第一に、2020・2021年度の学費に関しては、実質学費値上げとなるにも関わらず、その増額に見合う教学議論を伴っていない。大学財政のあり方等に理解は示すが、教学議論やキャンパス環境改善を行うことを踏まえ、学費政策を論じるべきである。

第二に、今回の学費政策の提起に関しては、『RS 学園通信』に大学による説明が記載されているが、同紙での説明では、在学生および入学者・受験生の誰もが理解、納得のできるものではないと考える。具体的な増額分を示すなど、大学財政を学生により開かれた形で公開するよう求める。

以上を踏まえ、以下を求める点とする。

【全学協議会での論点】

- 2022年度以降の学費が提起される、2021年度全学協議会の議論の根拠となりうるような、財政の可視化を行うこと
- すべての学生が立命館の財政施策そのものと、教学施策やキャンパス整備との関係性について、理解し、納得できるような状態にすること
- 「R2030」をはじめとする中長期的な視点において、学費への依存度を下げる取り組みを具体化し、確実に実施すること

◎わくわくするキャンパスづくり

全学学生アンケート p17-18／補足レジュメ p43-44

RS 学園通信で、仲谷善雄総長から出されたメッセージ「わくわくする大学・キャンパス創造」を議論する方向性に学友会としても賛同する。学生の知的好奇心を喚起する環境を整備すると同時に、時代に即した学びやすい環境づくりを進めてほしい。

また、この項目に関しては「全学学生アンケート2019」において、わくわくする学園づくりのためにどのようなことが必要か、自由記述で回答を得た。その中では、新しい環境を整備してほしいという声よりも、現状の食環境や空調、通学、Wi-Fi環境などの課題を改善してほしいという声が多かった。このことから、現状の課題を、新しい技術の導入を行い、改善するよう求める。

【全学協議会での論点】

- キャンパス環境の見える化（駐輪場・食堂の混雑状況可視化やバス待ち時間の表示など）
- 授業へのICT利用促進およびBYOD（Bring Your Own Device：自分のデバイスを持ち込んで活用する）の推進
- 知的好奇心を喚起するような最先端の研究にふれあえる環境の整備

◎学生の成長の可視化

補足レジュメ p45-46

教学の質の可視化を行うことは、協創施策など各施策の到達度を明らかにすると同時に、学生が立命館大学へ入学後、どのように学び、成長したのか調査することができ、学生にとっても学びの実感へとつながる重要なものであると考える。2018年度全学協議会を経て、学友会は教学部との懇談会を複数回実施し、「学びと成長調査」や「授業アンケート」の結果をもとに可視化を進めてほしいことを協議してきた。それらだけではなく、卒業生への追跡調査を含め、多面的に検証することを求めてきた。第2回代表者会議では、試験的に一部の卒業生に対するアンケートの実施を行っていることを確認した。

さらに、教学に関するだけでなく、立命館大学に入学した学生が、どのような活動を行い、どのように成長していったのかを可視化することができれば、より大学としての魅力を発信することの一助となると考える。第2回代表者会議では、2018年度より課外自主活動を行う学生の取り組みを可視化するプロジェクトが始まっていることを確認した。

2019年4月には、「大学評価・IR室」が開設され、学内における自己点検・評価のしくみを構築し、成果検証をより推進する組織としての体制がつけられた。しかし、本学の内部質保証に関しては可視化できていない部分も多いと考える。このような体制をより効果的にするためにも、立命館大学に入学した学生が、どのように学び、どのような活動を行い、どのように成長していったかを可視化し、データとして蓄積することで、発展的な学びや、学びのアドバイスにつながると考える。既に実施している取り組みを推進しつつ、正課・課外の枠組みを超え、学生の成長を可視化する仕組みづくりが必要である。

【全学協議会での論点】

- 本学の内部質保証・成果検証を行う取り組みをさらに推進し、内外から学びの質を保証する仕組みづくりを行うこと
- 本学に入学した学生が、どのように学び、どのような活動を行い、どのように成長していったかを可視化し、データとして蓄積できる仕組みづくりを行うこと

◎学園の見える化・発信

補足レジュメ p47

全学協議会に向け、この間実施してきた各種懇談会や協議を踏まえ、学友会が指摘している課題の多くは、可視化が不十分なことや、周知不足であることに起因していると考えられる。その結果、学生が知らなければならないことが周知されていないことや、学生に対する様々な取り組みの「見える化」ができていないと考える。大学が行っている取り組みや、立命館の学びの特徴などは、発信を行わなければ、学生の実感にはつながらないと考える。

また、立命館には正課・課外を通して様々な活動を行う学生がおり、国内のみならず世界的に活躍する学生もいる。そのような学生の活動を大学がさらに発信することで、学生が切磋琢磨し、良い刺激を受けることにつながると考える。

【全学協議会での論点】

- 教学施策・学園財政や立命館の学びについて可視化すること
- 大学が行う様々な施策など、取り組みを学生に見える形で発信すること
- 学生の様々な取り組みを学内外に発信すること